

バウジンガーを読む

——「科学技術世界のなかの民俗文化」への案内——

河野 眞

Abstract

The present paper is an introduction of theories advocated by Hermann Bausinger (1926-), a professor of folklore in the University of Tübingen and one of the international leaders in the field. This paper is also intended to find out how far his theories are valid, when an explanation is made about various aspects of life in the present-day Japan. For his study is characterized by his strong intention to criticize and correct the shortage of German folklore long concerned with what he calls 'relics', the traditional life-style before the Industrialization.

In his main work, *Folk Culture in the World of Technology* (1961), he laid the foundation for a new folklore study, examining the influence of technological innovations on folk culture. His study was motivated by his intention to break down those racial studies carried out in Nazi Age, as Nazism was supported by the study of old Germanic mythology. In that respect his study is a new development of German folklore and an inevitable consequence.

As mentioned above, the present paper is not only a serious examination of Bausinger's theories but at the same time a study of general rules over the folk life of today under the influence of at once high technology and continuous intermixture of various cultures of the world.

はじめに

この小文は1997年11月頃に当時担当していた愛知大学大学院(文学研究科・欧米文化専攻)の授業科目「西欧民俗学研究」にちなんで執筆しました。授業の回数では4回分にあたり、したがって講義録のような性格のものです。

内容はドイツの民俗学の現代の動向への入門ということになります。なかでも、ヘルマン・バウジンガーという民俗学者の仕事への案内に絞っています。今回『文明21』誌への掲載にあたって、執筆の事情にかかわるところから、文体なども特に改めずにおきました。この

分野への基礎的な紹介を今も果たしていることを願っています。

1

ドイツ語圏の民俗学から、特にヘルマン・バウジンガーについて紹介しようと思います。バウジンガーの名前は、日本でも民俗学の方々のあいだでは比較的知られています。しかしその活動や理論の中身となると、かならずしも伝わっているとは言えないようです。そこで4回にわたって案内を試みるのですが、それは、この数十年のドイツ語圏の国々の民俗学の特色のいくつかにふれることともかさなるでしょう。というのは、バウジンガーは、1960年代から今日まで、ドイツの民俗学界のリーダーで、国際的にも影響をあたえてきたからです。もちろん別の観点に立つ学派もあり、視点を異にする重要な研究者たちもいますが、戦後50年におよぶドイツの民俗学の歩みは、ある時期以降はバウジンガーの存在によって性格が規定されてきた面があると言っても過言ではありません。

ドイツ民俗学界のこうした趨勢については、日本民俗学会の機関誌『日本民俗学』でも、これまでに何度かとりあげられています。また、ドイツ語圏の民俗学の紹介は、すでに坂井洲二さんや浅井幸子さんが手懸けておられますが、そのばあいにも戦後の動向についてはやはりバウジンガーが中心にすえられています。そこで、ここでの進め方ですが、彼の主著のひとつであり、戦後の記念碑的な作品でもある『科学技術世界のなかの民俗文化』を中心にみてゆこうと思います。これは1959年に当時33歳だったヘルマン・バウジンガー（1926年生まれ）が教授資格論文としてチュービンゲン大学に提出したもので、1961年に刊行されました。したがって現代の同時代的な産物とは言うにはやや時間が経っており、さりとて古典というには新しく、扱いにくい年代のものですが、今日にいたるドイツ語圏の民俗学は、このあたりを見ておかないと、流れがつかみにくいのです。

ハロウィンの二つの新聞記事

そこで、これからとり上げるのは、どう種類の問題であるのかということから始めたいと思います。バウジンガーが実際にとりあげている事例を引くと、込み入ったことになりまますので、今日の私たちのあいだのできごとを使ってみます。

この小文を書きはじめたときに、目にふれた新聞の記事があります。ひとつは10月30日付け（1997年）の「ジャパン・タイムズ」です。〈カボチャを外科手術〉という英文のタイトルのもとに数人のOLが大きなカボチャを相手にしている写真が掲載されていて、こんな解説がついています。

大阪のHホテルでは、電話のオペレーターの女性たちが、木曜日の提灯コンクール

に向けて、カボチャをくり抜くのに追われている。ホテルの約70人の従業員が24のチームに分かれて、イベントに参加する。カボチャは、ホテルで催されるハロウインのパーティーで披露されることになっている。

もうひとつは翌日の31日付けの「毎日新聞」の「街角」という小さなコラムです。それによると、ニューヨーク州のコーネル大学の高さ53mの時計塔の避雷針に、10月上旬から推定27kgの巨大なカボチャが突き刺さっているのが人々を驚かせているというのです。

「宇宙人が運んできたのでは」「いやいや、学生が父親のヘリコプターを借りてやったいたずらだ」と学生や職員の話に。……学校側からは「腐って落下すれば危険。撤去すべきだ」との声も出たが、費用がばかにならない。何よりも学生や職員の間では、「よくやった」「お見事」という声が圧倒的で、結局、カボチャは学生のハロウインの騒ぎを塔の上から見守ることになった。

この二つの記事は、新聞や雑誌でいつでも出会う種類のもので、これでなければいけないというわけではないのですが、実はこういう身近なできごとのなかにも、民俗の今日のあり方の特徴があらわれています。ハロウインという催しそのものは、もとはヨーロッパで冬の始まりの節目におこなわれていた伝統行事が現代的な改変を経ているものですが、それは今は横においておきましょう。注目すべきは、ヨーロッパに起源をもち、アメリカで発達した行事が、アメリカでも日本でもおこなわれるということです。ハロウインは、アメリカでは伝統文化です。日本では、国際的なホテル資本が顧客のために企画したアトラクションです。しかし両者のあいだに、決定的な差異があるとは言いきれません。どちらも現代の社会生活のなかでは不可欠なものとなっている〈イベント〉に一般的な特徴の方が際立っています。つまり、安心して親しむことができ、しかも目先の変わった趣向が折りこまれているので、日常生活のサイクルにアクセントがあたえられるのです。逆に、ハロウインが伝統行事であることにこだわり、その歴史的背景や宗教的基盤を重視して、伝統的な行事をその伝統の故土に固有のものと考え、現実に進行している事態の意味を見失いかねないでしょう。

今日、民俗ないしは元をただせば民俗であったものは、伝統文化という脈絡ではとらえきれない動きをみせています。民俗は、それが産み出された背景から分かれ出て、遠く離れた別の文化に居場所を増やしてゆくこともできるのです。たとえば中国の人々は、エイプリル・フールがことのほか気に入っているらしく、毎年〈愚人節〉には、いかにもありそうな作り話がニュースになって、時には世界を駆けめぐります。エイプリル・フールを成り立たせるような文化的な基盤は、儒教にも道教にも直接的には存在しないにもかかわらずです。あるいは数字の13の迷信が、今日では世界各地に広まって、多彩な展開をみせているのも同じ

種類の現象といえます。13をめぐる迷信は、起源から言えば十二進法が拘束性をもつ文化のなかではじめて意味をもつのです。しかし今日では、その伝統をもつ文化のなかですら、12との関係は忘れられていることが多いのです。たとえばフランス人のあいだでは、13を避けるために、12ではなく14を選ぶ人々がみられるとの観察もなされています。

こんな簡単な事例からも知られるように、民俗は起源の上では伝統文化に由来しながらも、今日ではその脈絡だけでは理解できないのです。では伝統とのかかわりでなければ、そこにはどんな法則がはたらいているのでしょうか。実はこういう問題に取り組んだのが、パウジンガーでした。

写真にみる民俗と科学技術の相関

もっともカボチャの話ではたわいがないので、もう少し深刻なものも挙げてみましょう。これもパウジンガーが引いているものではありませんが、その著作『科学技術世界のなかの民俗文化』に近い種類の現象です。

写真を例にとろうと思うのですが、言うまでもなく、カメラは科学的な技術機器の一種です。したがってそれによって生み出される写真は、科学技術の所産とすることができます。しかしその科学技術の所産に民俗的要素が多彩にからんでいる様子を、私たちは身近なところで経験しています。ちなみに民俗的要素といえば、何かおどろおどろしい気配をおもい浮かべたりしますが、そういう極端なところでも、科学技術と民俗は関係しています。たとえば心霊写真です。何気なく撮った写真に背後霊や守護霊や怨霊が写っているというできごとは、週刊誌やテレビ番組のすたれることのないネタとなっています。占星家や霊能家と称される先生方が、寄せられた写真を鑑定して、たんなる光のカブレと本物の心霊の発現とを選び分けるといった光景にも、テレビの画面でお目にかかったりします。

さらに過激な事例を挙げれば、日本中を震撼させたオウム真理教事件でも、写真が一定の役割を果たしていました。そこでは、蛙跳びとかいう運動が、一瞬をとえらることができる写真技術のために空中浮遊などというものに変貌していたことは、記憶に新しいところです。もちろん現今の日本文化のひとつの結晶としてのオウム真理教事件の基本的な筋道は、もっと別のところにもとめなければならないでしょう。写真は小道具程度の役割でしたが、犯罪になるかどうか（これは決定的な分水嶺のひとつではありますが）という観点を別にすれば、それと同質性をもつできごとが日常的とも言えることに注意を払ってよいでしょう。大事故は、小さな多くのトラブルを背景にもっており、小さなトラブルもまた、その分野の一般的な仕組みのなかに裾野をひろげているのです。

普通はどう考えられているか分かりませんが、迷信のような民俗現象と、科学技術とは、対立的な関係にばかりあるわけではありません。科学技術が普及すれば迷信が駆逐されるとは言い切れないのです。むしろ人間と科学技術との関係には、魔術が生成されるメカニズム

がはたらいっている側面があると言ってもよいのです。

これは理論的には厄介ですが、事実の側からみると納得しやすいという種類の問題でもあります。ちなみに、やはりつい先日の11月半ばのことですが、NHKの衛星放送で中継されるCNNのニュースで、アメリカでは、このところ青少年のあいだにオカルト・ブームが起きていることがとり上げられていました。そのブームを助長しているのは、インターネットのホーム・ページでオカルト用品の通信販売がさかんになされていることにあるということです。それどころか、最近ではインターネットで霊力の一部を送ったり、心霊をやりとりするといった現象すら発生しています。

しかも、今日、その種のできごとは珍しくないとも言えるのです。今年（1997年）の3月26日には、カリフォルニア州のサンディエゴで、カルト集団「天国の門」の信徒39人が集団自殺をとげました。この団体では、信者の輪のひろがりには主にインターネットを介してなされており、その活動の拠点はOA機器をそなえたオフィスさながらであったようです。そして、肉体を捨てて天国の門へ向かう（宇宙船に乗り換える）という集団自殺の予告らしきものをホーム・ページに残したのです。つまり最新の技術機器を媒介にして、魔術がこれまで以上に、あるいはこれまでとは違ったかたちで力を揮っている場合があることが分かるのです。

* * *

今日は、前置きのような話に終始してしまいました。民俗は伝統文化の脈絡だけでは理解できないのではないかと、そして科学技術と民俗とのあいだに相関的な関係が考えられるのではないかと、という二点です。こういう問題に、1950年代の終わり頃にドイツ人の民俗研究者が取り組んでいたことに注意を向けていただければ幸いです。しかしお断りしておかなければなりません、バウジンガーの著作は、私のこの案内から一部の方々が想像されるやも知れぬほど刺激的ではありません。実例の点でも、コンピュータをめぐる民俗現象などはふくまれません。年代的に致し方のないことながら、性急な期待にはそぐわないでしょう。

また、私はバウジンガーの民俗学を日本の民俗の諸現象にもあてはまるような一般的な形におきかえています、もとの叙述は、ちょっと違ってきます。民俗学においては、その理論形成に、それぞれの文化や国で培われた独特の論理がつよく反映されているところがあり（だからこそそれらの機微にふれているのですが）、普遍的な表現にはなかなか行きつかないところがあるようです。ドイツ語圏のばあいが正にそうで、その学史的な推移はまことに特異です。そこでは、私たちが経験しなかった種類の問題の立て方がなされたり、理解に苦しむような前提がはたらいたりしてきました。バウジンガーは、そうした研究分野の全体にわたる暗面を克服することを試みているのですが、それまた内部の者の視点からなのです。それもあって、その行論には分かりにくい点や、私たちが首肯するのに躊躇するようなものも

ふくまれています。ともあれ、今回は、テキストの一部を読みながら案内をします。

2

ドイツの民俗学の戦後の特徴を、特にヘルマン・バウジンガーに注目して案内しています。第二回は、代表的な著作『科学技術世界のなかの民俗文化』を中心にみてゆきます。今日において、民俗学とはどんな学問であるのか、またその根拠はどこにあるのかがテーマです。

実は、この問題意識はバウジンガーだけのものではありません。第二次大戦後のドイツ語圏での民俗学界では、多くの民俗研究者が多かれ少なかれその課題に取り組んでいました。そうする他に出口がないような危機的な状況があったからでした。しかし学史的な側面は後にふれることにして、今はともかくも、その主張を聞いてみましょう。

科学技術と科学技術世界

バウジンガーの着眼は、民俗学の範囲や課題を科学技術と関係させて考察したことにありました。しかし科学技術を射程に置くといっても、科学技術の個々の現象を分析したり、科学技術論を展開しているわけではありません。今日の生活文化には、科学技術が縦横に走っているという一般的な状況を、民俗学が全体として組み入れるには、いかなる視点に立つべきか考察したのです。たとえば、飛脚や馬車ならあつかえても、電話や自動車が機能している世界はお手上げというのでは、民俗学は成り立たないと考えたのです。さもないと、民俗学は電話や自動車が出現する以前の時代に限定されるか、あるいは電話や自動車によっていかなる変化もこうむらない部分が人間にはそなわっていて、そこにこそ本質的なものが宿っているといった仮説でも立てるしかないからです。

そこでバウジンガーが試みたのは、科学技術そのものと〈科学技術世界〉(technische Welt, world of technology)を分けてみることでした。科学技術は自然科学の法則がはたらく場といってよいでしょうが、科学技術と人間との交流は、かならずし自然科学的なものではないという点への注目です。言い換えれば、日常生活の心理のなかで科学技術はどんな姿を呈しているのかという問です。したがって〈科学技術世界〉は、科学技術そのものを、広い意味での精神科学あるいは人文科学の領域へ移しかえた概念と言ってもよいでしょう。

重要なのは、徹底して合理的な構造をそなえた〈科学技術〉そのものと、〈科学技術世界〉の区別である。——後者のなかでは、前者の合理性が後退して危機に瀕するといったこともおきる。たとえばオットー・フリードリヒ・ボルノウがおこなった意識内容の詳細な分析などをみれば、この区別はいっそうあきらかになる。科学技術とまじわっているときの意識は、たいていはもっぱら次のような意図に向けた固定状態にある。すなわち、

〈この科学技術は絶対的にたしかである〉。したがって心の深部においては、意識的な行動はまったくなされていない。そこにあるのは、むしろナイーヴな行動である。フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーも、おなじ問題にちなんで例をあげながらこんな説明をおこなった。〈競輪選手やパイロットや機関士の意識は、醒めてはいるが、夜の暗闇のような夢幻的な観念によって限られた狭い場のなかにある。つまり、器械の機能に向けられた機能的な覚醒である。〉それどころかこの覚醒は、そのときかかわっている器械の諸々の機能に向いているのではなく、器械を媒介にしてであう現実の薄片にひたすら向けられているようにおもわれる。

これは、技術機器とまでは言えないもっと低いレベルの道具においても、潜在的には生じていることがらです。荷車や挽き臼のような原初的な道具でも、それを導入することによる人間の能力の拡大はめざましいものであったでしょう。しかし注意すべきは、そのとき、それらの道具や機器が出現しないばあいにはありえた何ものかを、人間は失ったと考えられることです。世界は拡大しただけでなく、せばまりもしたのです。世界は、荷車や挽き臼を通じた世界という限定を受けたのです。このあたりの事情は、すでに古代の思想家によって認識されていたとして、バウジンガーは『莊子』の次の文言を引用しています。

吾、之を吾が師に聞けり。機械有る者は、必ず機事あり。機事あるものは、必ず機心あり。機心、胸中に存すれば、即ち純白備はらず。

機械にたずさわる者は、機械に沿って行動するようになる。機械に沿って行動する者は機械の心をもつようになる、そうなればもはや平静な心をもって広くものごとを見ることはできない、といった意味です。しかし思想史をなぞることが目的ではなく、民俗学の成立事情に科学技術がどのように関係したかを確かめるのが課題です。バウジンガーは、莊子と一派通じるところのあるヴィルヘルム・グリム（グリム兄弟の弟）の次の言葉を比較します。

昔話など無くてもかまわないという気持ちになるのは、金銭欲や歯車の轟々たる機械音が、他のすべての思考を麻痺させてしまう場所においてだけである。逆に、人間生活の安定した伝統的な秩序や慣行がなお強力にはたらいているところや、人間的な感情や、周囲の自然との連関がなお感得せられる。昔話は、現在が過去と切りはなされていないところで生きつづける。

ヴィルヘルム・グリムは、いわゆる「グリムの昔話集」の編者であるとともに、19世紀半ば頃からドイツ語圏の各地に民俗学の研究グループや同好会が形成されていったとき、その

精神的な指導者でもありました。そのヴィルヘルムの発言には、図らずも民俗学の成立の動機が現れています。つまり科学技術が浸透しつつある現実をたいする戸惑いと反撥、逃避と自己防衛、そして良い意味でも悪い意味でも別世界の構築です。

古代中国の箴言は、現世放棄の文化（その文化は、科学技術の発達で、自然という土台からそれてしまいかねないときには、その作用を実質的に断念することができた）から生い育ったのであった。これにくらべるとヴィルヘルム・グリムの言葉は、自然を制御し科学技術によって世界を征服するようになった時代の文化のなかで発せられている。事実、かかる真情吐露を標識として、民俗学はその歩みをはじめたのであった。そのために民俗学は、科学技術が拡大するとともに、いよいよ片隅に追いやられただけでなく、（もっと悪いことには）その圧迫のなかで現実をたいしてますますあまい態度をとるようになった。それは、まだロマン主義のなかでは、せまりくる危険を前にした、つつまじやかな叫び程度であったが、時とともに、リアルな現実にあらがうやみくもな激情へとたかまっていた。

このようにみると、民俗学の成立には、科学技術が一般化する時代の到来が重い意味をもっていたことが分かります。科学技術を生み出し促した時代の動きと言ってもよいでしょう。すなわち近代ですが、近代の大きな特色は、たいの局面で科学技術がからみあっていることにあります。そこで次に、民俗と科学技術のかかわりのあり方をさぐってゆきますが、これはとりもなおさず、民俗学の成立の契機として常に底流にはたらいっている諸要素を洗いなおすことでもあります。

民俗世界と科学技術世界

バウジンガーは〈科学技術世界〉と対比したときの世界のあり方を仮に〈民俗世界〉と名付けています。民俗世界とは、慣習、手仕事、また経験法則のような伝統的な生活の智慧が相対的に優勢であった世界のあり方です。もちろんいつの時代にも科学技術は機能しています。したがって純然たる民俗世界というものはありませんが、図式的に言えば、近代の進展は、民俗世界から科学技術世界への転換といえます。過去においては、民俗世界が広い地の部分を占め、そこに科学技術が浮かんで網の目をつくっていたのです。しかし科学技術が生活のすみずみにまで幅をひろげるとともに、科学技術の方が一般的な土台をかたちづくり、そこに民俗文化が点々と浮いているという逆の構図に変わってきます。それが科学技術世界のなかの民俗文化です。

〈隣村〉

こうした動きは、たとえば〈隣村〉の観念によっても知ることができます。徒歩や、せい

ぜい馬車が交通手段であった時代には、隣村は、生活のさまざまな局面で強固な境界をかたちづくっていました。隣村が、異郷の性格すら帯びていることもありました。交通手段の未発達や、それとからんで維持された狭域的な支配の仕組みなどを背景に、隣村との関係には重大な意味がこめられることになりました。嫁取りは隣村からというルールのある村もあれば、隣村から忍んできた青年を古井戸に投げこんで制裁を加えるところもあった、という具合です。ところが汽車が走り始めると、隣村は頻繁かつ簡便な行き来のなかで、境界としての存在感を薄めてゆきます。一帯の通勤が可能になり、電話が普及し、さらに自動車が行き交うようになると、境界は拡大に向かい、いたるところに風孔が開いて、ついに破裂してしまいます。こうして A 村と B 村は隣村という関係自体が崩壊するのです。バウジンガーは、これを空間の膨張と呼んでいます。

〈ふるさと〉

しかし伝統的な村社会の境界性がほぼ消滅したあたりから、まったく質の異なった地域性の観念が育ってきます。〈ふるさと〉です。ふるさとが（特定の土地という意味では）実体を欠いた観念であることは、そこに隣村とか隣町といった境界の意識がほとんどはたらないことが、よくしめしています。それは特定のいかなる土地でもありません。それは、ふるさととともに比重をたかめている文物のあり方をみれば、いっそうあきらかです。民俗衣装や民俗家屋やその内部の設備などです。ドイツ語圏では、民俗衣装と称されるものには、実際にその土地の昔の衣装ではないばあいが多いのです。特に広く浸透したのは、アルプス地方の酪農者の晴れ着と狩猟団体のユニフォームです。これらのために、それぞれの土地の本当の民俗衣装が駆逐されてしまった場合が少なくないのです。

バウジンガーは、〈ふるさと〉のキイ・ワードとして、〈磁場〉と〈かきわり〉を挙げています。磁場は、ふるさとという虚像がもつ吸引力であり、かきわりは、芝居の背景画のような誰にでも分かる個別性を超えた絵姿です。つまり様式化です。この様式化は、むしろ画一化といってもよいくらいで、ひとつの国民国家がひとつの典型的なふるさと像にまともところまで進んでゆくとも指摘しています。これに較べると、技術機器の方がまだしも地方色や個人色に富んでいるくらいだ、と誇張した言い方などもしています。1950年代の新しい厨房設備の仕様の分布と比較しての発言です。

ちなみに、技術機器にたいするこういう見方も面白いと思います。技術機器については、しばしば没個性的との烙印がおされますが、バウジンガーはむしろその選択において個性表現のチャンスが豊かであることを指摘しています。逆に、現代では、民俗文化の様式性や画一化に警戒をしなければならないとも言うのです。それは、民俗文化がもはや〈民俗世界〉のなかの民俗文化ではなくなっていることに起因します。バウジンガーは、1950年代のドイツのふるさと像をもとに考察しているのですが、一世代前あたりからの日本の様相にもあてままりそうです。もっともそれは、一概にマイナスとは言えないでしょう。一種の逆説をふ

くむきわどい調整によって心理的な均衡が図られるような状況に、今日の私たちが暮らしているということなのです。

3

戦後から今日にいたるドイツ語圏の民俗学のあり方を、特にその代表的な人物であるヘルマン・パウジンガーに注目して案内していますが、その三回目です。パウジンガーは、その〈科学技術世界〉について、三つの側面から考察を加えています。「魔法としての科学技術」、「〈自然なもの〉としての科学技術」、「退行を喚起するものとしての科学技術」で、いずれも第一章の各節の見出しになっています。

魔法としての科学技術

科学技術が、いつの時代にも、常識や通念を超えた仕組みや効果によって人々を驚かせてきたのは不思議ではないでしょう。しかもその驚き方には、時代や状況によって共通した型がみとめられます。そのなかで比較的初期に属し、典型と言ってもよいものに、科学技術が魔法とみなされるという種類があります。

ヨーロッパの中世に、初期の自然科学者が魔法使いさながらに見なされたことはよく知られています。アルベルトゥス・マグヌスやパラケルススといった自然科学の開拓者たちには、奇怪な伝説がまつわっています。しかし注目すべきは、自然科学者が魔法使いとみられたのは古い時代のことで、時代が新しくなると誤認は消え、理知的に理解されるようになったとは言いきれないことです。そういう単純な発展線もまったく否定してしまうことはできませんが、科学技術の魔術視は歴史のなかで何度もその波が起きています。たとえばバロック時代には、からくりや仕掛けが好まれたように、科学技術にたいする素直な喜びと関心が優勢でした。それにくらべて、むしろ次の近代初期に、自然科学にたいする不安や恐怖が擡頭した、とパウジンガーは指摘します。そしてその（今日からは微笑ましいような）例証として、天気予報の創始者のひとりをめぐるエピソードを掘りおこしています。

司祭イエレミーアス・ヘースリンは、シュヴァーベン・アルプスにおいて気象の研究をおこなった人物だが、1784年にその成果を刊行したさい、降りかかる風評とたたかうために、その小冊のはじめに、くどくどと前書きをしたためねばならなかった。

〈余、当地諸処の災厄を予見せんことをもとめられたり。あるは飢饉、あるは疫疾、あるは恐ろしき雹の襲来なりき。また、かくのごとく噂されしこともあり。余、人の避くべからざる、死に至る年齢を予言するばかりか、そが刻限をも算出せしとぞ。さばかりか、余が己の冥界に旅立つ時をも予告せしとの噂立ち、何時何分まで言ひ立つる嘘

言、余が近隣にまで広がったり。されど、かかる妄言蜚語のたぐひ、あまさず余が耳に入りたるに非ず、余の聞知せぬ僻ごとなほ多くあるならん。余、ここに説くところの原理にもとづきて天気予報をなしたれど、邪推と無理解以て迎へらるること、常なりき。予報の当たらんか、信憑に傾き易き者、はたまた迷信深き者の、之を恐怖し、気病みすること際限なく、之が活用など思ひもよらぬ有り様なり。余、数年前、新聞紙上に抗議文を載せしが、流言のさらに収まる気配なく、抑へんとするも、さらに効なし。余が望み、予言者に数へらるるには、断じてあらず。何となれば、予言者とされんか、何時の日か、妄想家と非難せらるるは必定なればなり。……)

魔法としての科学技術が、時間の進展とともに克服されるわけではないことは、私たちの周りをみわたしてもあきらかです。もちろん魔法のあり方には変動があります。科学技術にかかわる特定の人間そのものを異質な存在のようにみるという見方は消えてゆき、技術機器だけがひそかに魔法のいない手になってゆくという変化もそのひとつです。コンピュータの発明者もエンジニアももはや魔術者とはみられません、コンピュータは種々の魔術を媒介する物体でありつづけるのです。科学技術と魔術は、それぞれ人間存在のなかに根拠をもっています。どちらかが他方を圧倒して消滅させるといった交替可能な関係にあるのでも、同じ平面に並んでいるのでもなく、それぞれが独自の原理をもちつつ交錯しているのです。

〈自然なもの〉としての科学技術

科学技術と生活文化の関係の第二の特徴は、科学技術が生活世界に溶けこんで、〈自然な〉環境をかたちづくってゆくことです。それは、一般的に言えば、科学的な技術機器も道具であり、したがって身体の延長として人間化されてゆくことができることによっています。しかし技術機器は、人間と道具のかかわりが長い歴史を通じて発展してきたのにたいして、その独自の性格のために、道具一般にまとめてしまうことができないという側面ももっています。すなわち科学技術のばあいは、技術革新にみられるような全体としての急激な変化や変転が個々の機器にもつきまとっているところがあります。個々の技術機器はその用途を満たすかぎりでの特定の道具であるとともに、同時に科学的な技術機器一般の代表者として、技術機器の全体の運動のなかに人間を巻きこんでゆきます。

しかしそれにもかかわらず、技術機器が〈自然な〉外界を形成するとすれば、それはいかなる経路によって実現されるのかという疑問が湧いてくるでしょう。その経路は、ひとつの道しかないのではなく、複線的です。そのひとつを挙げると、技術機器も、伝統文化の延長上に機能しているばあいがみられます。御利益があるとされる教会堂に牛馬や家畜を連れて行って多産や病気予防を願った馬匹祝禱が、今日では自動車の祝禱にとってかわられているのは、その脈絡で理解できます。また行旅の守護聖人である聖クリストフォルスのデザイン

のマスコットが、今世紀前半のフランスではじまって以来、今も各国で人気のあるカー・グッズとなっているのも、この種類に数えてよいでしょう。

もちろん伝統的な用具から技術機器への切り換えには、心理的な抵抗が避けられなかったこともあとづけることができます。それが典型的にみられるのは、技術機器の導入にさいしてキリスト教会でなされた数々の議論です。チャペルの内部や祭壇に蠟燭の代わりに電灯をもちいることにたいしては、電気ははたして霊性をつたえることができるのかといった議論がなされたことがあり、説教にマイクロフォンを導入するさいにも、同じ疑義が突きつけられたことがあります。しかしこうした抵抗は多少のドラマを伴うにせよ、おおむね軽微に終わり、次には技術機器の目的である利便性や華美の実現が表面化してゆきます。その赴くところ、巡礼もバス・ツアーが主流になり、また南ヨーロッパ諸国にみられるように、巡礼の教会堂にネオンサインのイルミネーションがほどこされるまでになってゆきます。

こうして科学的な技術機器は〈自然のような〉周りの世界を形成するようになります。しかしそれが生活世界の一般的な土台にまでなると、今度は科学技術化された周りの世界から〈有機的な生きた自然〉を意識的に取り出そうとする志向もつよまります。樹木や草花にことさら大きな意義が付与され、樹木や草花のフェスティバルが企画されたり、母の日やヴァレンタイン・デーに特定の草花がプレゼントされるという風俗が成立してゆきます。これらは科学技術世界のなかに〈本当の自然〉という孔をあけようとする志向のあらわれですが、そのばあいの自然の〈本当〉らしさの中身は様式化されたセンチメンタリズムです（この指摘は人間行動の心理をナイーブ、センチメンタル、イロニーというドイツ思想に特有の三つの概念に整理することにもとづいています）。なぜなら、それらはたいてい、科学技術化された周りの世界への対抗物という限定的な性格をみせるとともに、様式化された真剣さという特徴をみせるからです。したがってこれ自体が、科学技術世界で決まって起きる運動のひとつと言えるのです。

以上は、科学技術が自然な相貌を帯びる過程のいくつかをとりだしたのです。これらの指摘はたいへん示唆に富むものですが、私見では、この箇所は理論化がやや手薄であるように思われました。しかし他方、母の日の風習をめぐる自然観の分析などは、短いものであるにもかかわらず、今日の自然保護運動のプラス・マイナスの両面にも適用できるようどころがあるようにおもわれます。

退行をうながすものとしての科学技術

〈退行〉(Regression)は、バウジンガーの民俗学のなかでは、中心に位置する概念のひとつと言えます。これは心理学の用語からの転用です。すなわち、幼児が、弟や妹の誕生などにともない、心の不安定や親の愛情をもとめるなどのために、食事や排泄などの習慣について、確立以前の段階にもどってしまう一種の防衛機制を指す術語です。

バウジンガーによれば、民俗学が近代になって成立したこと自体が一種の退行であったとされます。近代化（それは科学技術の進展と一体ですが）の猛威のなかで、これ以上進みたくないという心理を土台にして、民俗学は成り立ったと考えられるからです。

しかし退行は科学技術の性格とも交差しています。技術機器は人間にとって慣れしたしんだ外界を形成し、また道具として身体の延長とすらなることができますが、他方、仕組みであることによって、手仕事の道具とは異なります。あるいは道具においてはまだ潜在的であった自然らしさと仕組みとの二つの側面の対立が表面化します。それが故障および故障への予感であり、これが技術機器に特有の限界をかたちづくっています。

機械が言うことをきかないという事態は、口承文芸の一部になっており、またそこであつかわれる対象でもある。しかもそのあつかわれ方は、機械の実際の故障の度合をはるかに超えている。そうした語りものは、機械が故障を起こすやも知れぬ、また修繕を要するばあいがあることを指しめすだけではない。むしろこの目的連関を断ちきり、科学技術が総体として限界をもつことを証かすのである。すなわちその限界の線上で、機械の故障は理知的なあきらめによって受け入れられ、また事態の退行的な克服が発生し、さらにその両者が分岐してゆく。そこではまた、語りものが多彩に展開する。たとえばモータリゼーションがはじまった時期のものとして、次のような聖譚めいた小咄がつたわっている。〈救世軍の一士官が、自動車を運転していた。すごい音をたてる代物で、とある交差点で動かなくなった。士官は、車からおりて、クランクを回しはじめた。大わらわで回していると、それを見た通行人が、嘲りの声援を送ってきた。しかしエンジンは動かなかった。それやこれやで汗だくになった士官は、やにはに上着を脱ぎ、クランクを放りだすと、にくむべき自動車の踏み板に跪いた。大都会のまん中で、白昼、意地悪い衆人環視のなかで、お祈りをはじめたのである。それから改めてクランクを回したところ、何と、エンジンは音を立てたのだ。〉……すなわち科学技術が言うことをきかなくなる瞬間が話のバネになっており、そこを軸にして対応がうながされる。この数例からだけでも、ここに退行を触発させる力がこもっていることがあきらかになるであろう。

退行は、科学技術の隙間に魔術的思考が顔をみせるという形態にかぎられるのではありません。一見したところ科学技術の先端的な成果とかかわっていたり、未来を先どりしているかのようなイメージでも、事實は、先祖返り的な心理の容器にすぎないことがあります。〈火星〉、〈空飛ぶ円盤〉、照射すればたちどころにすべてを破壊する〈殺人光線〉、これらはその存在の確認が科学の一層の発展にゆだねられていたり、これから開発されるかも知れない未来兵器などです。したがって、科学技術の先端に位置するかのようにはみえます。しか

しその中身は、古い民俗的な観念にすぎないという一面もあります。〈火星人〉は異次元の存在を信じてきた古い観念をかたちの上だけ未来に投影したものであり、〈殺人光線〉は魔法使いが杖をひとふりして相手をからめとってきた古典的な手管とかさなります。

しかし道具立てのちょっとした変化の意味するところは絶大です。技術機器になじんできた心理と、本来の居どころを失ってしまった古層の観念が結節点を作り、両者ともに移調効果を達成するからで、そこにすこぶる迫力に富んだ現代の神話が成立します。それらは、民俗文化が科学技術によって分断されることなく新しい環境のなかへ伸びてゆく証左としてだけでなく、技術機器との付き合いのなかでの息抜きという意味でも、またその息抜きを媒介にして科学技術と人間のつきあいがいっそう濃密になってゆくという意味でも、科学技術世界のなかの民俗文化なのです。

4

最終回の今回は、『科学技術世界のなかの民俗文化』を学史的な側面からとりあげます。これまで見てきたのは主に第一章の「〈自然な〉生活世界としての科学技術世界」です。それにつづく三つの章は次のように組まれています。

第二章 空間の膨張

第三章 時間の膨張

第四章 社会の膨張

各章はそれぞれ4節に分かれます。したがって全部で16節です。ここでは各節の見出しではとりあげません。耳慣れない術語や造語がまじっているからです。ただ参考に、数例だけ紹介します。たとえば第二章の第一節は「場所の単一性」です。これは演劇論でいう三一致の法則のひとつ〈場所の一致〉にあたる言い方で、この見出しのもとに、伝統的な民俗の前提条件である狭域空間を問題にしています。第三章第一節は「加速現象と定常状態」という見出しですが、心理学の用語である〈発達加速現象 Akzeleration〉と生化学用語の〈定常状態（流動均衡とも）Fließgleichgewicht (steady state)〉を借りて、慣習・習俗と流行・ファッションという対立する概念を調べています。さらに最後の節である第四章の第四節は、「ピグマリオン」と記されます。バーナード・ショーのドラマの題名ですが、ミュージカル「マイ・フェア・レディ」の原作という方が通りがよいでしょう。下町の花売り娘を短期間で上流階級の貴婦人に育てあげようとする二人の言語学者の実験がモチーフです。この作品を材料にして、身分社会の変容と崩壊の過程をさぐるというのです（なおこの箇所については、本書での叙述をさらにくださったかたちにしたものが著作『言葉と社会』の一章となっており、これは翻訳がなされています——参照、浅井幸子・下村峯子訳、三修社、1980年）。

たいそう凝ったものの言い方ですが、パウジンガーが民俗学の新しいスケッチを描く意気

込みに燃えていた様子がつたわってきます。なかには、ここでの気負った表現が、後に別のもっと落ち着いた用語に発展した例もあります。たとえば祭りの伝承者たちが、民俗学の理論や知識をとり入れて、それに合わせて祭りの実際をととのえてゆくといったことは、今日よくみられる逆流現象です。それをバウジンガーは、その頃の流行語を借りて〈ハイゼンベルク効果〉と呼びましたが、今日で〈フォークロリズム〉という術語が国際的にも定着しています。

ナチズム民俗学の克服

先に、バウジンガーが仕事を始めた頃のドイツ語圏の民俗学界には、異様な緊張が走っていたことにふれました。それは、ドイツの民俗学の歴史的経緯と関係しています。ドイツの民俗学は他国に先駆けて発達し、グリム兄弟のようなスーパースターが登場したことによって、高い評価を得ていますが、実態は大分違います。19世紀末から今世紀にかけて民俗学はナショナリズムに強く傾き、最後はナチズムと合流したからです。あるいはナチ党の幹部たちが、当時はやっていた民俗学説の信奉者でもあったという面により注目すべきかも知れません。たとえばナチ党は、政権を掌握すると、まもなく民俗行事の〈収穫感謝祭〉を国民の祭日と決めました。しかもその行事は年によっては、ニュルンベルクの党大会を上まわる規模で催されたのでした。のみならず、党大会の祭典が戦争とともに中止されたのにたいして、収穫感謝祭は空襲下のベルリンでも挙行されていました。これにとどまらず、ナチズム運動には、民俗色や民俗学理論の色合いが濃厚にみとめられるのです。ちなみにドイツの大学の民俗学の講座は、ナチ党の主導で開設されたという経緯があります（ベルリン、ハンブルク、ゲッティンゲン、チュービンゲンなどの諸大学）。

こうした事情のために、第二次大戦のドイツの敗戦は、ドイツ民俗学の破産ともみなされました。事実、民俗学者のなかには逮捕されたり、大学から追放された人も出たりしました。民俗学の戦争責任を問う声や、学問分野としての正当性への疑問もたかまりました。民俗学のナチズムへの同調は、政治権力によって強いられたというのではなく、もっと宿命的なところがあったのです。

そのため、戦後の民俗学は、ナチ時代に迫害を受けたり、不遇を耐えた人々が中心になって出発することになりました。この戦後の第一世代の代表者たちは、ナチ時代に時流に屈しなかつただけに、見識も気骨も卓越していました。また波瀾の経歴とはうらはらに、学風はおおむね穏やかで、ドイツの学問伝統の良き継承者でした。しかしそれで事態はおさまらなかつたのです。

それは特にナチス・ドイツの法的な後継国家でもある西ドイツにおいて深刻でした。学問分野そのものの信用の失墜に加えて、個々の研究者をめぐることも、ナチスへの関与が仲間内でも世評においてもとりざたされるなど、非難がとび交い不信が渦巻く状況が容易に解消さ

れなかったのです。そもそもナチズムは、ドイツ人の歴史や思想や感情の根深いところで形成されていたので、個々の人々の経歴についても白か黒かに決めてしまえるようなものではなかったのです。民俗学の立て直しにあたって、学問の伝統をどこまでさかのぼって拠り所を見いだすかという議論もおきましたが、それは却って方向を見失う事態につながりました。グリム兄弟に帰れとの声があがったり、W・H・リールに帰れという叫びが聞かれたものの、グリム兄弟はナチス・ドイツにおいても神格化された存在であり、リールとなればナチズムの先覚者のように尊ばれたのでした。

こうして現実と思想の両面で混迷から脱け出せないなかで、次の世代が登場してきます。1950年代後半から60年代はじめ頃の民俗学の論考には、具体的な事例の分析はそっちのけで、抽象的な議論に走るものが少なくないのです。しかしそれはやがて、ドイツの民俗学の伝統を全体として否定するところに出発点をさだめるという冒険につながってゆきます。その代表者で、その後の方向を決めるような内実をそなえていたのがバウジンガーです。バウジンガーもまた、戦後の民俗学界の最大の課題であるナチズムの克服をテーマとしましたが、そのさいナチズムに傾斜した過去は、一時の逸脱などではないと見るところまで進みました。ナチズムと同調して表舞台におどり出た民俗学説の多くについても、こう言い切ります。

それらは、民俗学が長く親しんできた観念がのほりつめた晴れ姿にはほかならなかった。

そして民俗学の生成以来の弱点を自覚するという観点から、バウジンガーは、戦後の再建をになった第一世代の人々をも批判してゆきます。それどころか批判の矛先を、ナチズムへの抵抗のなかで死んでいった人々まで向けてゆきます。ある論考のなかで、こんな評価を下してもいます。

彼らは、学問的な理論において正しかったのではなく、人間として正しかったのだ。

空間、時間、社会という基準——伝統民俗から現代民俗へ

以上をふまえて、著作『科学技術世界のなかの民俗文化』の章立てです。空間、時間、社会の三種類の基準があつかわれるのですが、それ自体は一般的な言葉のように聞こえます。しかしここには、民俗学史のエポックがかさなっています。民俗学の発達の歴史に大きな意義をもつスウェーデン学派の考え方です。

1930年代以来、スウェーデンでは、新しい民俗学の波が起こっていました。その要点は、ロマン派以来の民俗学の克服にありました。その直前までのスウェーデンの民俗学界にとって指標的な位置にあったのは、イギリスのジェームズ・ジョージ・フレイザーです。『金枝篇』の著者として知られています。フレイザーは、ヨーロッパの黎明時代には一種の自然宗教が

おこなわれ、しかもそれはキリスト教社会のなかでも、あるいは底流として、あるいは変形をとげながら後世にまで生きながらえたと考えました。そのさい北欧諸国の民俗にたいして、少なからぬ関心を寄せました。

ところで、日本ではあまり意識されていませんが、フレイザーの民俗学は、学史的にはドイツのヴィルヘルム・マンハルトに遡り、その〈マンモスのように肥大化した形態〉と評されたりします。マンハルトはグリム兄弟の弟子で、兄弟の古典文献学を民俗学に変えていった人物です。彼は、北欧の民俗には、神話にさかのぼる原初の思考が生きつづけているとの仮定のもとに、北欧のフィールド・ワークを手がけて、その後の民俗学の型をつくりました。

スウェーデンの若い民俗研究者たち、シグルド・エリクソン、シグルド・スヴェンソン、ヴィルヘルム・フォン・シドーといった人々がおこなった民俗研究の方法をめぐる挑戦は〈マンハルディアン批判〉と呼ばれています。マンハルディアンは、ネオロマン派系の民俗学者の総称です。そして、そこで力説されたのが、空間、時間、社会の三つの基準でした。

批判されたのは、現行の民俗を神話の延命とする仮説を証明しようとするさいの方法にありました。マンハルトのばあいは、農作業にちなむ民俗などを、神話や古代宗教と重ねあわせたのですが、その推論に飛躍があったというのです。しかもその欠陥が見のがされたことが、フレイザー卿の書斎における妖怪じみた虚構につながったというのですが、その欠陥とは、比較研究をおこなうさいの基準が粗雑であることにありました。事実、フレイザーにおいては、世界中のあらゆる地域や時代の事例が、相互につながりがあるかどうかに関係なく、例証として挙げられてゆきます。なかなかシンボリカルで面白いエピソードが多いのですが、極端なばあいには、ヨーロッパの民俗の意味づけにさいして、いかなる連係もあるべくもないメキシコのアステカ文明やマヤ文明の祭儀や伝承まで引き合いにだされたりするのです。したがって、気宇壮大な構想とも見えれば、空想とも言えるのです。19世紀末から20世紀にかけての西ヨーロッパ社会には、ある種の虚構にたいして抵抗力がはたらかない、判断力の麻痺状態のような一面があったようです。スウェーデンの研究者たちは、特に農耕儀礼をとりあげ、それらを、地域性、歴史的推移、社会構造の3つの側面から丹念にあとづけて、マンハルトーフレイザーの意味づけは成り立たず、神話に遡及させることもできないことを証明していったのです。

このスウェーデンでの動向は、1950年前後のドイツに紹介されて多大の反響を呼びましたが、それはナチ時代の民俗学のあり方、いわゆるナチズム民俗学を解明する鍵がそこにあるように受けとめられたからでした。今日からみると、ナチズムの批判を、戦勝国であるイギリスの民俗学の金字塔を相手にして進めたのですから、奇妙な構図といわなければなりません。しかし当時のドイツ人たちは、まじめに議論を煮詰めていってそうだったので、悪意をしのばせてはいなかったでしょう。事実、ナチ時代の民俗学説は、乱暴なものもまじっていますが、おおむねフレイザー流なのです。それにナチズム民俗学というと頭から拒否される

ものの、(差し障りをおそれずに申せば)たとえ今日の日本で紹介されたとしても、その断りがなければ、見分けがつかないのではないかと思われるようなものがあります。

これが、バウジンガーが、空間、時間、社会の三種類の尺度をとり上げた背景です。しかし注意すべきは、そこでの意図が、スウェーデン人や戦後まもなくのドイツ人たちの考え方とは違っていることです。スウェーデンの研究者たちは、その基準を厳密に適用しながら比較研究を進めたのですが、バウジンガーによれば、それは伝統的な民俗を研究するかぎりにおいて必要な手続きであり、普遍的な基準でもあるとされます。そして伝統民俗の認識における普遍的な基準がそのように措定できるのであれば、近・現代の民俗の解明においては、その基準がどのような変質を遂げているかを先ず考察しなければならないというのです。すなわち、空間、時間、社会という枠組そのものにかきた変化を検討することが、これからの民俗学の前提になるというのです。こうして構成が決められたのです。当時の議論に立脚しながら、その議論を覆そうとの意図がこもっており、挑発的な性格を帯びています。

* * *

以上、著作の章立てにちなんで、学史的な背景をとりあげてみました。最後にバウジンガーの理論が、その後、ドイツ語圏の民俗研究にどのように受けとめられてゆくかにふれておきます。

『科学技術世界のなかの民俗文化』が刊行されたのは1961年ですが、これは多大の反響を呼びました。私の手元には当時の書評が80種類余りあって、それには民俗学以外の分野での多くの反応がふくまれています。ドイツ語圏以外のものも少なくありません。しかしバウジンガーが民俗学界の方向づけに影響力を発揮するようになるのは、1970年前後からです。それは折しも、学生運動の高まりがみられた時期と重なります。またとりわけ、それに続く大学の制度改革のなかで、民俗学は戦後長くつづいた日陰者の存在を脱して、大学の教育課程にも広くとり入れられてゆきます。民俗学は現代科学に向けて幅をひろげ、またそれが民俗学の側からの歴史研究にも変質をうながしてゆきます。こうして今日につながる状況が作り出されていったと言えるでしょう。